

7. コロンビアの非日常 1 : お祭りの話 その2

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

7.1.2. 大衆フィエスタモドキ

ある新聞記事に「コロンビアはラテンアメリカで最もお祭りが多い国です。年間 3,400 以上のパーティが開催され、祭日の数は 1 万を超えます。問題はほとんどの場合カレンダーに現れないことなのです。」⁽¹⁾とあった。1 万もの祭典日など矛盾に見えるが、国の歴史を考慮するなら、このニュアンスはおそらく正しい。これが意味するのは、彼らの日常がもはや非日常であり、そこには深く、民族としての成り立ちがかかわっているのだ。

*反省

13 年前 (2010 年 11 月) コロンビア出張所に所長として赴任した際、私は気負っていた。「さあ、ここで思いっきりやるぞ〜」と、意気込みすぎているのかもしれない。また、着任から 1 年後に迫った出張所の創立 40 周年に向かって、あれもしなければ、これもしないと自分の思いばかり先行していたのかもしれない。以前、私は所員として在住していたのにもかかわらず、コロンビアという国とその文化や風習について知ったかぶりになっていたのだった。というより、日本で行う「モノ」をそのまま当てはめていたのだった。

出張所という「ミッションセンター」の機能を高めようと、天理教の「教理勉強会」「信者の決起の集い」「勤行 (おつとめ) 研修会」などを立て続けに開催していった。もちろん大半の信者は週日には仕事を持っているので、その行事のほとんどが週末、祝日に集中した。最初、人は集まった。が、少しずつ参加人数が減ってきた。ある集会の日に信者さんの一人が言った。「センセ、なんで今日やるんですか? 今日何があるか知っていますか? コロンビアナショナルチームの試合じゃないですか? 大事なワールドカップの予選リーグなんです! 一緒に見ましょうよ!」そこで、話し合いを早々に切り上げ、みんなと予選リーグをテレビで観戦した。

そういうことを経験して、だんだんと理解してきた、「郷に入れば、郷に従え」ということを。このコロンビアではサッカーの試合も自分たちの「非日常」であり、楽しみの一つなのである。性別は関係ない。男も女も時には顔に黄・青・赤と三色に「化粧」し、我を忘れて叫び、踊り、全身を駆使して応援する。ともあれ、出張所の創立 40 周年は成功したが、自分の中では完全に「空回り」をしていた、と反省した。

スポーツ観戦は、彼らの非日常であることは間違いないと思う。米国の野球観戦も日本のそれとは違い、家族や友人がまるでピクニックに行くような気分で見ているのがわかる。コロンビアでは以前、サッカー観戦に「アルコール飲料」はつきものであったが、必ず問題を起すので現在では禁酒となっている。

さて、スポーツ観戦やプレイの他、「フィエスタモドキ」として思いつくのが次の 2 つある。

*フィンカ (農場: 別荘) で過ごすこと

コロンビアの人は、休日が続くと旅行か「フィンカ」に行く習慣がある。フィンカというのは辞書では「農場」と訳されているが、農業従事者が栽培や牧畜を目的として所有する農場ではない。むしろ別荘というニュアンスに近い。自分が所有していなくても親、親戚、知人の誰かが持っている。別に上流階級でなくても、中流以上なら、誰かしら持っている。規模がさまざまであるが、フィンカは国民の非日常とは切っても切り離す

ことができない。

聖週間、長期の休み、年末・年始以外にも、「プエンテ (橋)」という日曜日と祝・祭日を連結させる連休に何回も出かけて数日間を過ごし、日常から離れ心身ともに「リセット」するのがフィンカの機能だろうと思う。家族や知人とただ過ごすか、同僚と過ごすかして休日の別荘暮らしを楽しむというところであろうか。

*誕生日や結婚などのセレモニーが重要であること

誕生日は、ラテンアメリカでは欠かすことのできない年中行事にも匹敵する「非日常」行事である。学校関係では幼稚園児時から仲の良い友達の誕生日には招待される。招待されるからこちらも招待する。その連鎖反応である。また、仲間、同僚においても誕生日には祝う。その祝い方は、それぞれパーティを開いて親戚、友人を招待したり、職場でケーキだけを用意して、ハッピーバースデーを歌ったりと、千差万別である。決して忘れてはいけない、なぜこんなにもコロンビアでは誕生日に重きをおくのだろう、ということ。私の拙い想像力によると、この治安の状況で 1 年無事に過ごすことができたことに対して、神への感謝の気持ちが人々のバースデーへの熱き思いへと変化するのもかもしれない。

また、米国発祥であるとされる「ベビーシャワー」も、この誕生日に匹敵するほど重要視され、また必ず開催される。言葉通り、雨のごとく降り注ぐシャワーのように出産を間近に控えた妊婦にプレゼントを送ることである。米国では、現在どのようにベビーシャワーが行われているか情報を持たないが、コロンビアでは、この会に出席するのはほぼ女性のみということになっている。

7.1.3. 伝統的フィエスタ

冒頭にも言及した「深く歴史がかかわっている」ということを説明して、次回のための序文としたい。

カレンダーに現れないということは、あくまで現在のカレンダーに現れない、ということであって、先住民にはそれぞれの民族の暦がある。また奴隷制度があったコロンビアにはアフリカ系の人が多く入り、少数ながら彼らにもそれぞれの暦があったに違いない。

マルコス・ゴンザレスというコロンビアの歴史家は、祭日やお祭りの研究に携わっている。彼は、コロンビアの首都ボゴタ地域において「ボゴタの先住民のカレンダーを調べると、先住民の民族信仰、神話や神々、豊潤が折り混ざっている。基本的には太陰暦である」と言う。⁽²⁾

中世、スペイン人が中南米を征服した際、文化の支配があった。例えば、先住民の宗教施設の上にキリスト教の教会を設置する抑圧政策も行われた。ヨーロッパ人が中南米に持ってきた暦に、キリスト教の祭日が多いのは当然である。また、独立してから、愛国心を養うために、独立記念日や独立戦争最後の戦いも祭日となっている。

これを踏まえて、今回は伝統的フィエスタについて詳しく述べていきたい。

[註]

(1) <https://www.eltiempo.com/archivo/documento/MAM-1636591>: EL TIEMPO 2005 年 2 月 10 日。

(2) 同上